

研究プロジェクト

記譜プロジェクト「音と身体の記譜研究」

2019年度活動報告

本研究プロジェクトは「記譜法（ノーテーション）」をテーマとして、芸術資源研究センターの発足時から継続しているプロジェクトである。発足時の研究テーマは「西洋音楽の記譜研究—書かれたものと響くもの」であり、2017年度からは「音と身体の記譜研究」を新しい研究テーマに設定し、活動を行ってきた。これまでの活動としては、「西洋音楽の記譜研究」のテーマのもとに、2015年度に「バロック時代の音楽と舞踏～記譜を通して見る華麗な時空間」、2016年度に「五線譜に書けない音の世界～声明からケージ、フルクサスまで～」をそれぞれ開催している。「音と身体の記譜研究」プロジェクトとなってからは、2017年度に民族音楽学者馬淵卯三郎の遺した1970年代のグアテマラ共和国における調査記録（フィールド・ノートおよび録音）を整理し、その一部をCD付き冊子『Un Trabajo del Profesor Usaburo Mabuchi de 1967—グアテマラ高地チャフル・イシルの縦笛と両面太鼓』としてまとめ、2018年度にはシンポジウムとコンサート「糸が紡ぐ音の世界」を催した。2019年度は、前年度末に本研究プロジェクト発足時より研究代表者を務めてきた柿沼敏江（本学名誉教授）が退官したことに伴い、新しい体制でプロジェクトに取り組むことになった。

2019年度は、過去5年間（2014～2018年度）のプロジェクトの蓄積を踏まえた上で、外部から様々な研究領域、研究テーマをもつ研究者を共同研究員として招き、各々の専門領域から「音と身体の記譜」について多角的に検討をし、議論する機会を設けることを課題としてスタートした。本研究プロジェクトでは記譜の概念を、演奏し、記録するための、いわゆる「楽譜」という枠組みにとどめてはいない。「書かれたもの（スクリプト）」を手がかりに、人類学者のフィールド・ノート、民謡の採譜（トランスクリプション）、音声の録音記録、身振りや舞踊の記譜などをも対象としながら、「記譜（ノーテーション）」を幅広い視野から捉え、考察することを目的としている。今年度の定例研究会では、6月に共同研究員の三島郁（西洋音楽史）、7月に米山知子（人類学）、10月に井上航（民族音楽学）、11月に非常勤研究員の滝奈々子（民族音楽学）が、それぞれの視点から「音と身体の記譜」についての研究発表を行った。

三島郁は17世紀後半から18世紀にかけての西洋音楽における鍵盤楽曲の記譜を対象に、音符の符幹の向きから多声的なテクスチャーとそれを演奏する身体との関わりを読み解いた。米山知子は伝承的身体表現において身体に刻まれる記憶のある種の記譜や記録とみなした上で、トルコのアレヴィーの身体技法セマーの伝承を、記憶やエージェント、イスラム都市文化における宗教的マイノリティのアイデンティティといった観点から考察した。井上航の発表はカンボジアの山地民クルンの祈禱句ポボンにおける声と言葉のあり方について、転記（トランスクリプション）することを通して分析的に捉えたものであり、滝奈々子はグアテマラのロック・マヤの思想はいかに記述可能かという問題に取り組んでいる。いずれの発表においても、ノーテーションは狭義の「記譜」ではなく、書かれたもの（スクリプト）や記述すること、当該の文化や社会を背景にして存立する身体や記憶という観点から捉え直されている。

本研究プロジェクトでは上記の研究発表とは別に、12月にルチャーナ・ガリアーノ（Luciana Galliano）氏によるフルクサスと記譜に関する講演、1月に井上春緒氏によるインドのタブラーの伝承と記譜法に関する研究ワークショップを開催した。

イタリアの音楽学者ガリアーノ氏の講演は「詩的な記譜：フルクサスの音楽概念」と題して、日本語で行われた。ガリアーノ氏は2018年に『Japan Fluxus』（Lexington Books）を出版しており、本講演はその著書の内容に準じたものであったが、氏はフルクサス結成前後のいわゆるプロト・フルクサス期の活動、同時代の様々な前衛芸術運動などにも触れながら、フルクサスを音楽面からわかりやすく解き明かしてくれた。ガリアーノ氏はフルクサスの言葉によって指

示される記譜とイベントについて、とくに日本のフルクサスのイベント（およびフルクサス的な活動）には、ある一点に焦点を合わせるという特徴があるとし、その一点にパフォーマーと聴衆の意識が重なり合わさることで時間の共有体験が生じるとした。フルクサスにとってパフォーマンスは重要な要素の一つだが、それは記譜という音楽的な方法によって遂行されている。ここに、フルクサスにとって音楽性が不可欠な要素であったことを読み取ることができる。そのようなことを再確認できる講演であった。

民族音楽学者の井上春緒氏を招いての研究ワークショップでは、インドのヒンドウスターニー音楽の中で用いられるタブラーの習得と記譜法に関する発表と、演奏家としても活動している井上氏によるタブラーと、シタール奏者の岩下洋平氏によるパフォーマンスが行われた。井上氏によれば、タブラーの習得は、伝統的には口唱歌を中心とした口頭伝承で行われてきたが、伝承の過程では、その口唱歌を備忘録的に書き留めるための簡易な記譜法が用いられているという。歴史的に遡ればそのような簡易な記譜以外にも、演奏の手順を詳細に記述するタイプの様々な記譜法が西洋音楽の影響を受ける形で考案されたというが、現在教授の場に残っているのは、口唱歌を簡潔に記した記譜のみである。井上氏はその理由について、ヒンドウスターニー音楽にとって不可欠な即興性は、様々なリズムや旋律の型を身体に蓄え、それらを実践の場で自在に引き出すことによって生み出され得るもので、厳密な記譜によって担保されるものではないこと、そして簡易な記譜は、そうした型を身体に染み込ませるための備忘録としてのみ機能しているとした。ときに2時間を超えるパフォーマンスが繰り広げられるヒンドウスターニー音楽では、その時間を持続することができるだけの即興性を身につけることが演奏家に求められるが、実際のパフォーマンスにおいて楽譜が用いられることはない。習得の過程に介在する記譜には、記し、残すという「ノーテーション」の役割を読み解く一つの鍵があるように感じた。

すでに記したように、本研究プロジェクトではノーテーションを「記譜」という狭い枠組みに限定せず、より広がりのある概念として捉えている。本年度の活動成果を基盤としながら、次年度以降も「音と身体の記譜」に関する考察をより一層深めていきたい。

竹内 直（芸術資源研究センター非常勤研究員）